



釜本  
邦茂



阿久根  
賢一



## 認知症をお持ちでも、一人ひとりの特性を見ていくことが、 とても大切なんです (阿久根)

**阿久根** 実はこの度、認知症ケアの最前線で気付いたことをまとめた書籍「認知症イノベーション～一人ひとりの“パラダイス”を創造するケアメソッド～」を、出版させていただいたんです。釜本さんにとって、認知症は身近にあるものですか。

**釜本** ごく身近には、無いんですよ。僕の家内の兄の奥さんがそうなので、「大変だよ、もう俺の顔もわからないよ。」などと、話は聞くんですけど。私の周辺にはそれくらいで、あとはテレビなどでそういった話題を見聞きするくらいですね。

**阿久根** 認知症は近いうちに、65歳以上の5人に1人になるといわれていまして、いつ、誰がなってもおかしくない。しかも年齢が上がるほど増えていき、90代では2人に1人ともいわれています。今後ますます進む高齢化社会を見据えた上で、看過できない事象なんです。

**釜本** そうなんですか。ご家族やケアワーカーさんら、お世話をされる方は大変ですよな。

**阿久根** そうなんですよ。本にも書かせていただきましたが、本当にしっかりと理解した上でケアをしないと、支援する人も、される人も不幸になるんです。特に家族介護の様につながるの深い家族であればあるほど、変わっていく姿が受け入れ難く、過去の姿が記憶にあるので必死になって元のように戻そうと介護する。だけど介護されている側は、なぜそんなことを言われているのかわからない。介護する側は一生懸命にやっても効果が出ない、介護される側も一生懸命にやられすぎてしんどくなっていく。そうやって、互いに疲れ果ててしまうんです（第一章「『認知症ケア』大転換!」）。認知症はいつ、誰がなってもおかしくありません。それに対して、私たちは介護という支援を通じて、一人でも多くの方の生活を支えていくことが、大事な使命だと思っています。

**釜本** 徘徊する人や暴力を振るう人など、認知症の問題行動には、様々なケースがあるということは聞いています。病院のなかを1日中歩く人がいるとか。病院中を徘徊するのならまだしも、外に出て行かれたら大変ですよな。僕はケガをして体が思うように動かさないことはありましたが、これは直せばまた元に戻れる。だけど認知症になったら、治るということはないんでしょう。

**阿久根** 一般的に、認知症は治らないと言われてます。

**釜本** どんどん進んでいく一方なんですよな。そう考えると高齢者の方は、普段から認知症にならないよう、いろんな対策等をやらないといけません。引きこもりになるのは良くないでしょうから、こうしていろんな人と話をするなどしたほうがいいでしょうね。今回の新型コロナウイルスの影響で、自粛してずっと家にいるとなって、引きこもりになってしまった人が、たくさん出たんじゃないかと思います。

**阿久根** この新型コロナウイルスの感染症が流行することで状態が落ちたり、認知症が進んだという話はよく聞きますね。ですが、たとえ認知症をお持ちであっても、私たちより優れたものを持っておられる方はたくさんおられるんですよ。

**釜本** それは、そうですね。認知症だからといって、違う目で見るとはいけないことです。

**阿久根** 認知症がある方に対しては、『何もできない人』と、ついつい固定観念で見えてしまいがちなところがあると思うんです。でも認知症の方で今の記憶がなくなったとしても、包丁を持ったから見事に料理ができる方がおられたり、目が見えにくいという認知症の方が、針と糸を持ったらすっと針に糸を通されたりします。ですから「困った人」と一括りにするのではなく、一人ひとりの特性を見ていくことが、とても大切。そのことを、あるご入居者を通じて教えられたことがありました。

**釜本** それは、貴重な経験をされましたね。他には、どんなことがありましたか。

**阿久根** 昔、ピアノをやっておられた方で、普段は会話が噛み合わなかったりするのに、音楽のイベントで上手にピアノを弾かれます。先ほどお話ししました料理をされる方なのですが、いつも家に帰りたいたいと不穏になっているのに、包丁を持ったら、「みんなに食べさせたい」と上手に材料を切るんです。また認知症の有無に関わらず、人のお世話をすごくされる方もいらっしゃいます。そんな事例を、たくさん見てきました。認知症をお持ちであっても、人の役に立ちたい思いを持たれている方には、それを尊重してあげることが、すごく大切だと学びました（第三章「事例で見る『ラテラルケア（現実肯定支援）』」）。

